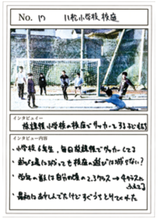
境界での暮らしを象る

暮らしの素

場所：八松小学校

01 敷地



藤沢市立八松小学校のフェンス。大通りとそこから枝分かれした道路に面し、通行人が多い。その間にある空き地は閉ざされている。

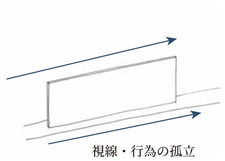
02 課題



人を拒絶し分断するフェンス

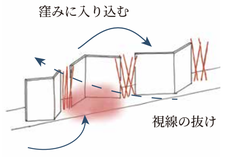
安全のための境界が小学生と通行人の視線、行為を分断してしまい、世代間のつながり、地域と学校のつながりが失われてしまっている。

03 ダイアグラム ― 暮らしの素による建築操作

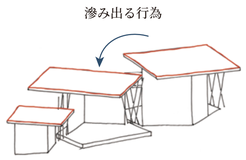


高い壁で覆われた境界

現状



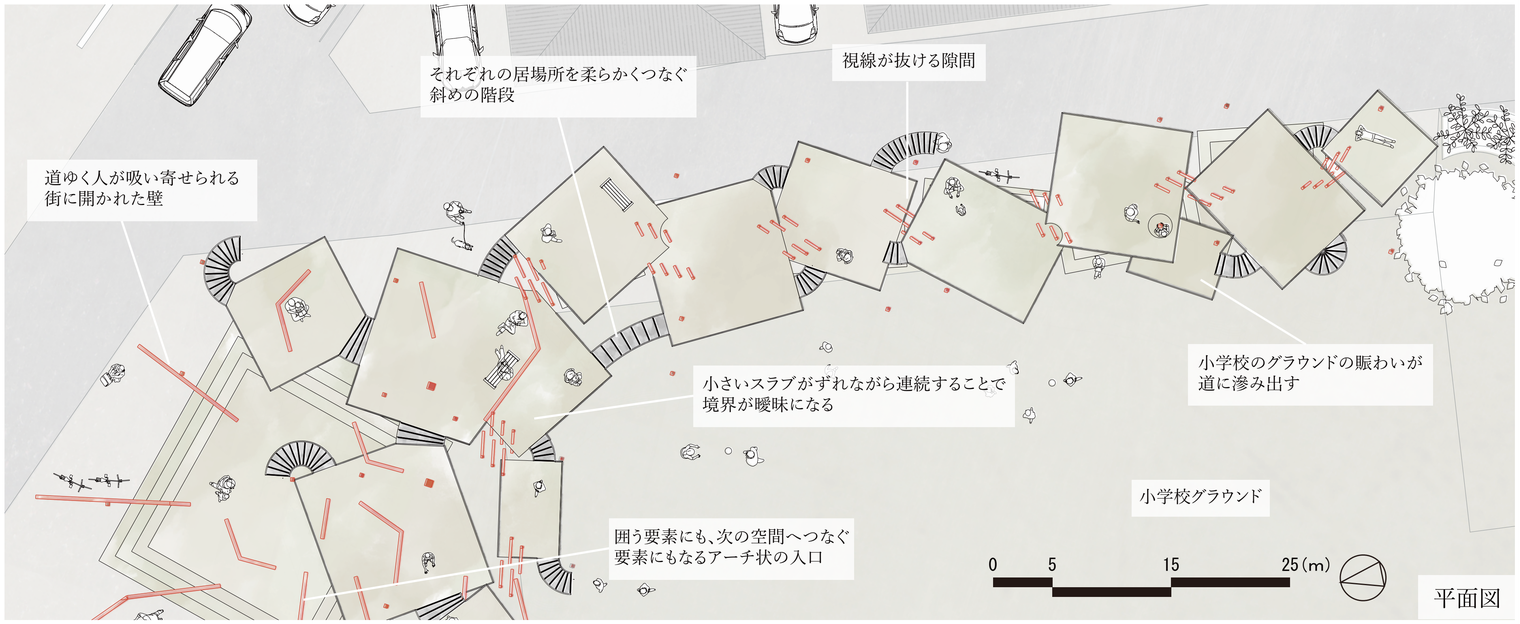
窪みと柱で境界をろ過



スラブを上下にずらす



空間を共有する大屋根



平面図



断面パース



ふらっと立ち寄ることが出来る休憩所。
ここで休んでいると、隙間から見える小学生らの活動で活気がもたらされる。

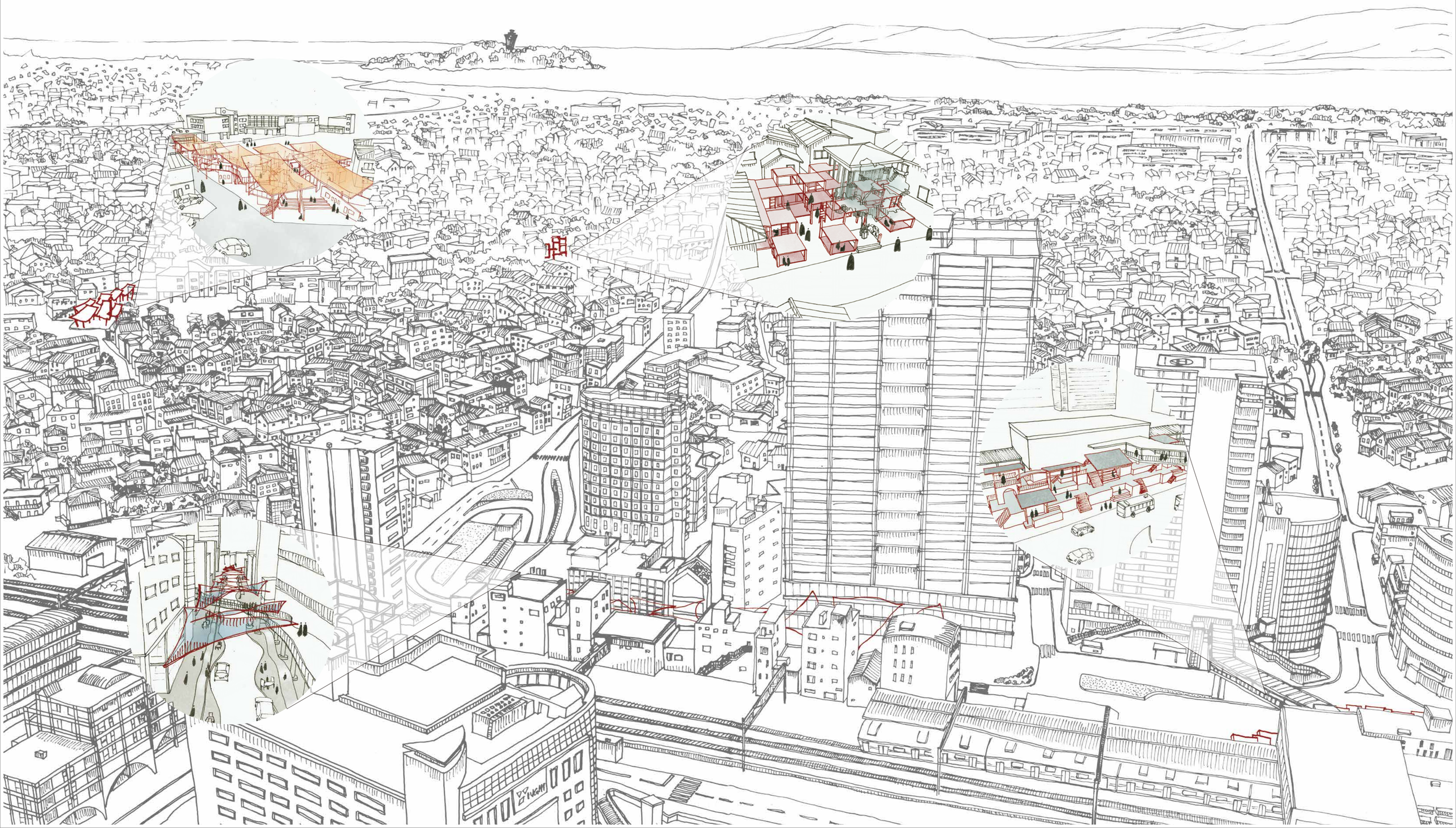


道と学校の境界が混ざり合い曖昧になる場所。
小学生と街ゆく人々が出会い、関わり合い、同じ空間を共有する。



道を歩いている人が引き寄せられる。
ポスターにつられて覗いてみると、居心地のよさそうな空間がたくさんある。

暮らしを象る



消費での暮らしを象る

暮らしの素

場所：南町公民館

01 敷地



辻堂元町の南町公民館。この敷地には祭りに使われる山車がしまわれる倉庫があるほか、日常的には住民のゴミ捨て場にもなっている。

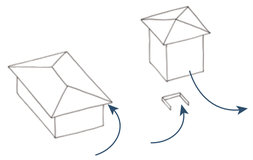
02 課題



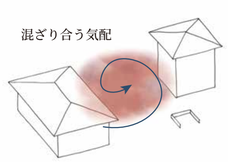
特定の目的時のみ利用する

毎日のゴミ捨て、毎月の公民館でのイベント、毎年のお祭りというイベントが行われる時間以外は空間が閉じており、住民の気配が感じられない。

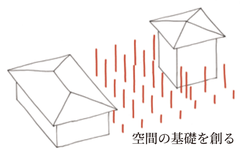
03 ダイアグラム ― 暮らしの素による建築操作



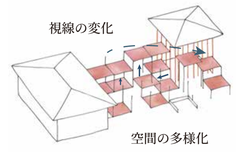
各空間にかかわりがない現状



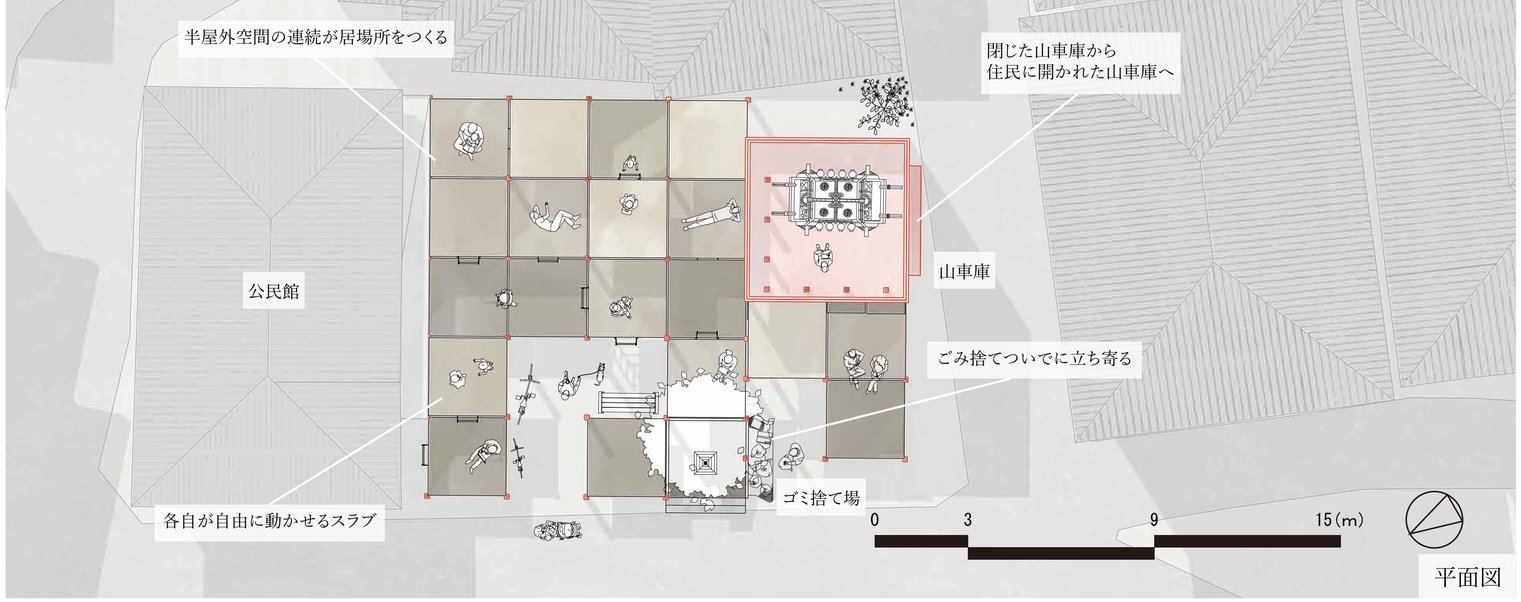
行為を重ね包み込む



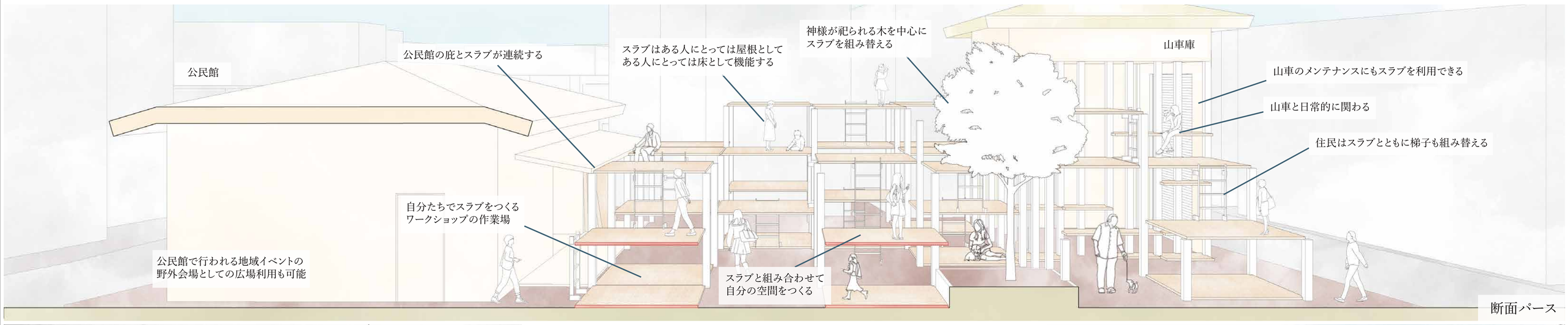
変化して分節する



ずらし境界をろ過する



平面図



断面パース



公民館まで屋根がかかる。
屋根の上で遊んだり、屋根の下でワークショップが開催されたりする。



スラブが山車庫まで伸びている。
祭りに備えてメンテナンスをすることで、日常と年１回の行事が重なる。



スラブがおもちゃを飾る棚にもなる。
ごみ捨てのついでに行ったリユース活動が住民との緩いつながりを生む。

移動での暮らしを象る

暮らしの素

場所：辻堂駅南口商店街

01 敷地



辻堂駅南口の商店街。駅からのアクセスの良さや、付近に大学のキャンパスがあることから、長いあいだ老若男女で賑わいをみせていた。

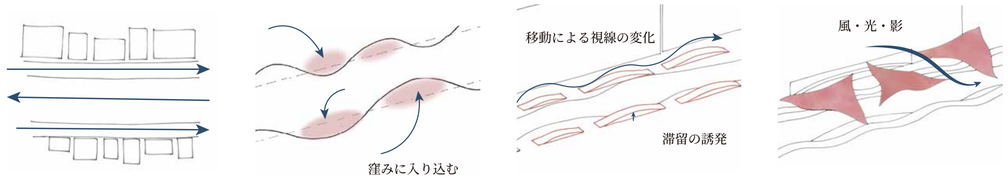
02 課題



最短距離で通り
過ぎるだけの道

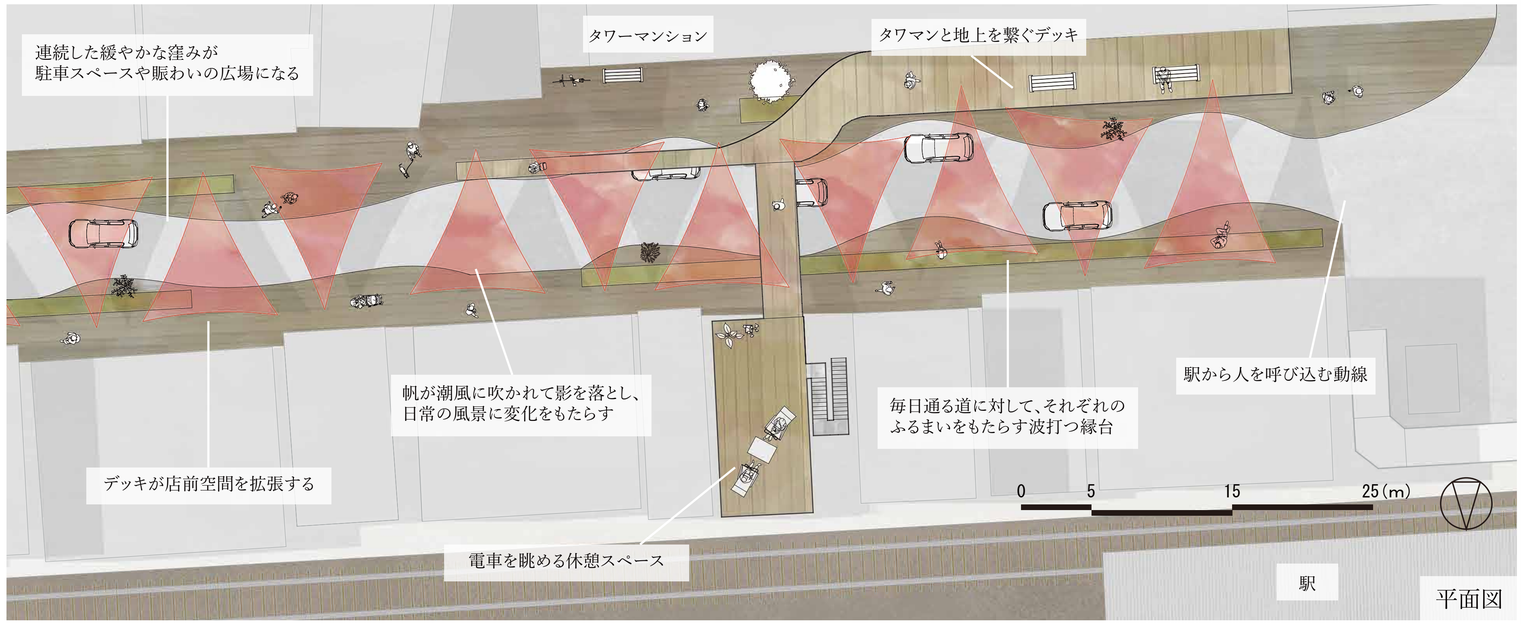
近年駅北口に大型商業施設ができたことで、客足が少なくなり、シャッター街と化したことで、単に駅まで最短距離で移動する道になりつつある。

03 ダイアグラム ― 暮らしの素による建築操作

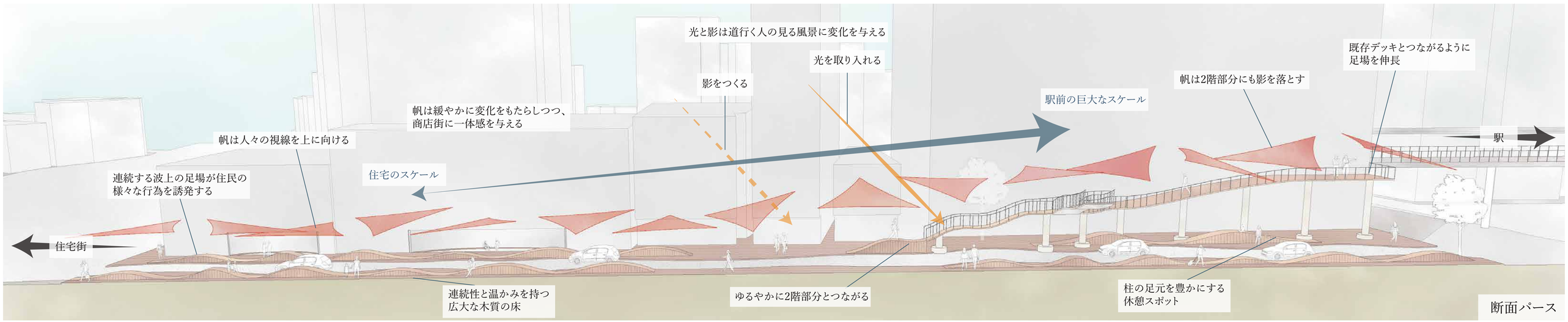


最短距離で移動する道 ▶ 大小の窪みをつくる ▶ 垂直方向に隆起させる ▶ 建物に貫入させ帆を張る

現状



平面図



断面パース



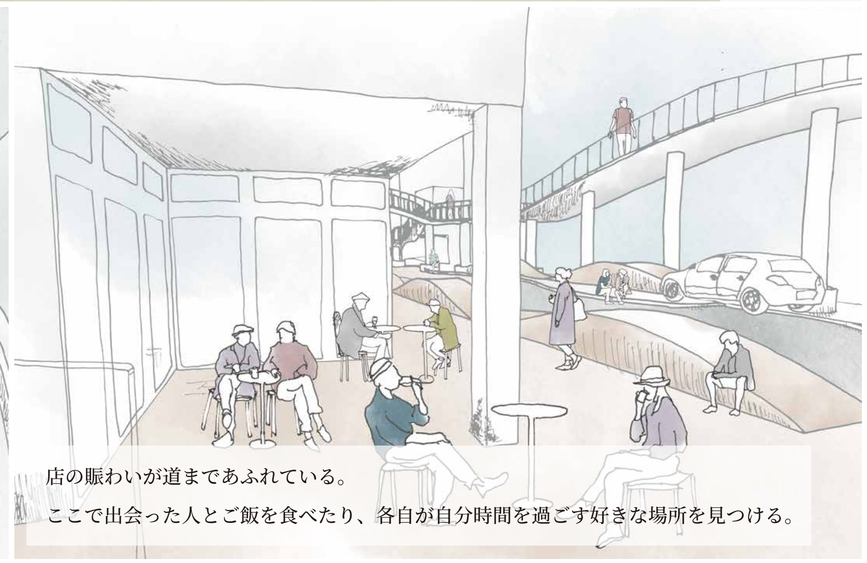
潮風にゆらぐ帆。

ふと空を見上げると、些細な変化が自分もこの街の一員であることの実感を与える。



既存建物に食い込んだ落ち着きのある場所。

壁に囲まれ、目線が下がり、街ゆく人々を見守る。



店の賑わいが道まであふれている。

ここで出会った人とご飯を食べたり、各自が自分時間を過ごす好きな場所を見つける。

01　住むと暮らし

今日のまちは、機能ごとに整理され、私たちは与えられた目的に従ってまちを消費している。その場の役割を果たすことで完結し、私たちは「住む」ことに留まっている。

しかし「暮らす」とは、その場で立ち止まり、思い思いの行為や関係を重ね合わせ、意味を編み出していくことではないだろうか。



＜住む＞
まちとのつながりが感じられず、街を意識化していない状態

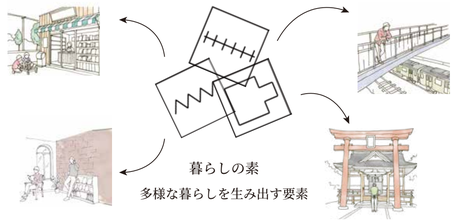


＜暮らす＞
地域に根付いており、まちを意識した状態

02　暮らしの素

「暮らし」のかたちは人それぞれであり、その過ごし方や価値は一様ではない。あらかじめ用途を定め、行為を限定するだけでは、多様な「暮らし」は生まれにくい。

本設計は、特定の目的を提示するのではなく、訪れる人や暮らす人が自由な発想で多様な時間を紡ぐことのできる空間を目指し、その契機となる建築操作の方針・概念を「暮らしの素」とする。



03　敷地 — 神奈川県藤沢市辻堂

駅前の再開発で生まれた便利で機能的な新しい街と、一歩裏に入れば今も息づいている古い路地や祭りの気配がある。



新しい街



辻堂らしい風景

04　調査 — 辻堂にある暮らしを巡って

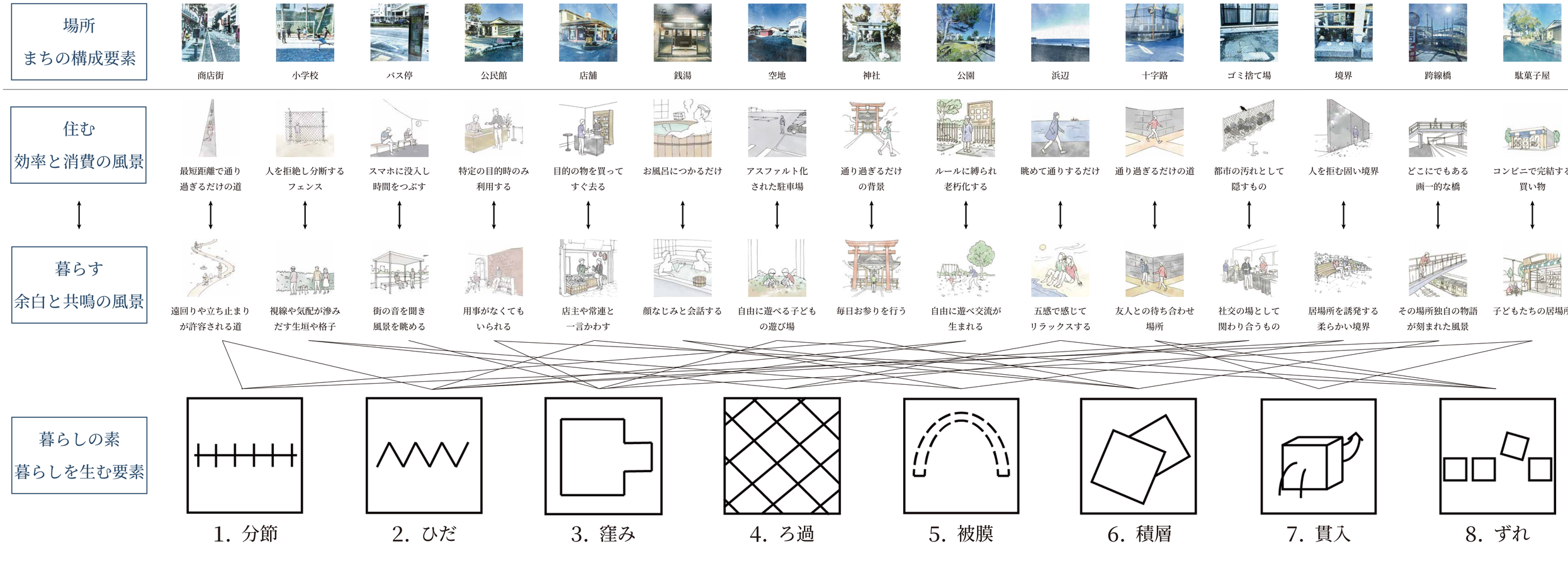
「暮らしの素」を見出すため、まちの住民へのヒアリング調査を行った。まちの構成要素である場所で、その場所とその時のインタビュイーの行為、普段のまちでの過ごし方を記録した。

機能として与えられた「住む」ではなく、そこににじみ出た個々の「暮らし」に着目することで、まちの中に潜在する価値を明らかにすることを目的とした調査である。



05　暮らしを象る — 暮らしの素を抽出する

調査によって集まった 15 個のまちでの暮らしを一般的な「住む」と対比させながら分析を行い、そこから浮かび上がった空間的特性の共通項を「暮らしの素」として抽出する。
本設計では抽出された 8 種の暮らしの素を、まちに点在する「住む」になりつつある場に施し「暮らし」で溢れた空間になることを目指す。



待機での暮らしを象る

暮らしの素

場所：辻堂駅南口バスロータリー

01 敷地



辻堂駅南口のバスロータリー。会社の通勤をはじめ、江の島に観光に訪れた人など多様な利用方法で溢れる場となっている。

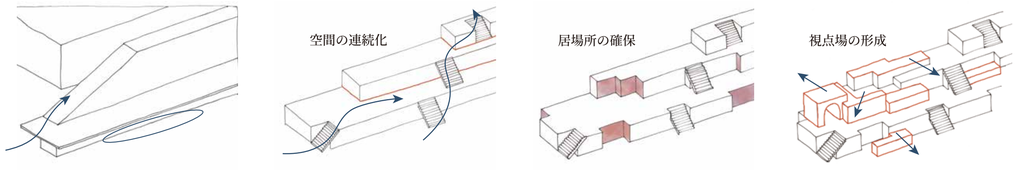
02 課題



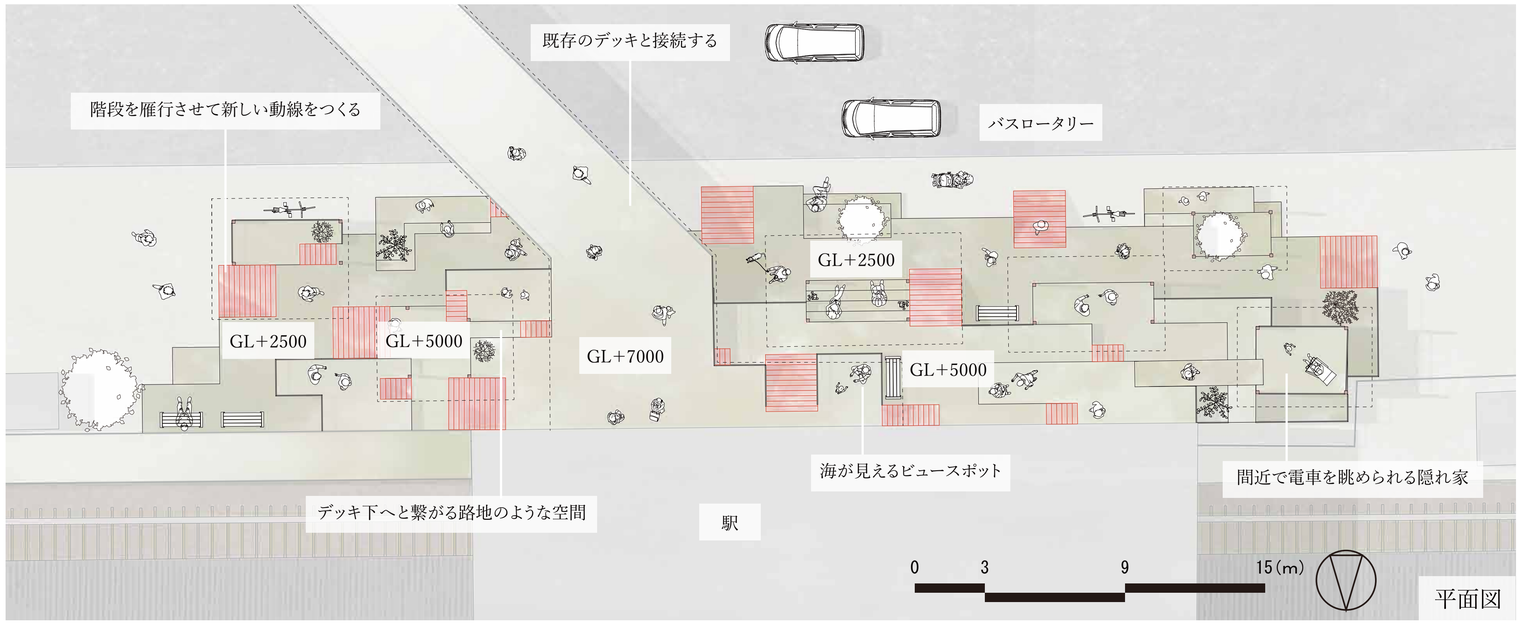
スマホに没入し
時間をつぶす

駅利用者の移動の結節点であり、駅からのびる大きな庇が空間を孤立させ、待つためだけの空間となり人々が街から意識を遮断している。

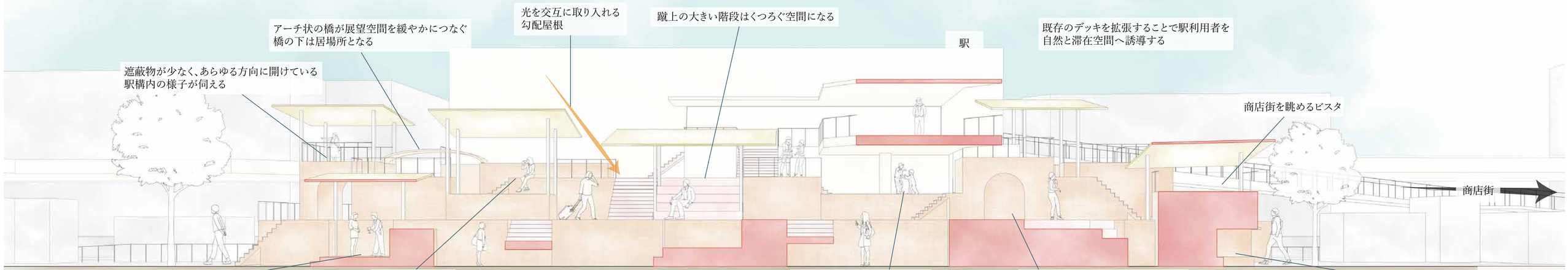
03 ダイアグラム ― 暮らしの素による建築操作



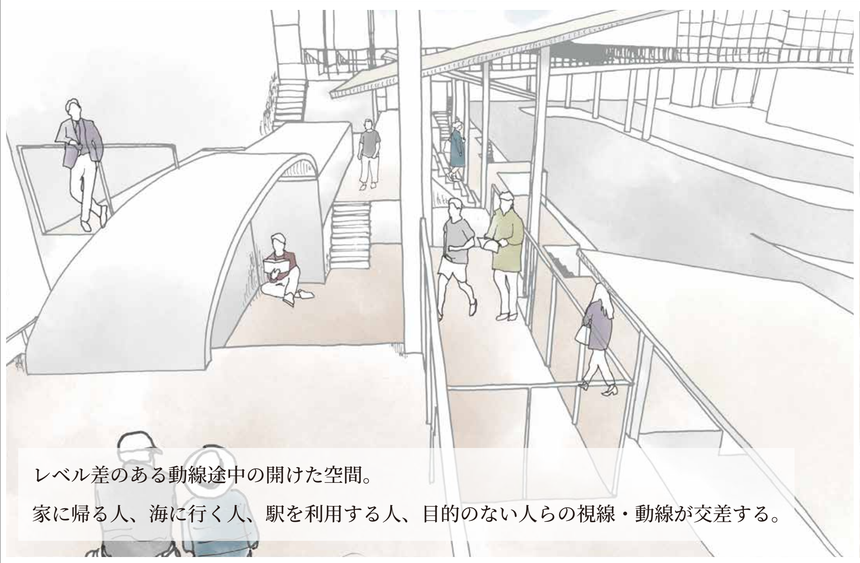
分断され空間が孤立する（現状） ▶ 床分割で動線が交差する ▶ ボリュームを取り除く ▶ ボリュームの再構築



平面図



断面パース



レベル差のある動線途中の開けた空間。
家に帰る人、海に行く人、駅を利用する人、目的のない人らの視線・動線が交差する。



目の前に広がる、海までの一本道。
つい景色を眺めて思いを馳せていると、乗る予定であったバスがやってきた。



デッキ下の狭い空間。
他よりも細い階段を抜けてたどり着くこの空間は、どこか落ち着きがあり居心地がいい。